

新美南吉・作 「おじいさんのランプ」より抜粋

「巳之助さんは今でもまだ本屋をしている。もっとも今じゃだいぶ年とつたので、息子《むすこ》が店はやっているがね」

と東一君のおじいさんは話をむすんで、冷《さ》めたお茶をすすった。巳之助さんというのは東一君のおじいさんのことなので、東一君はまじまじとおじいさんの顔を見た。いつの間にか東一君はおじいさんのまえに坐りなおして、おじいさんのひざに手をおいたりしていたのである。

「そいじゃ、残りの四十七のランプはどうした？」

と東一君はきいた。

「知らん。次の日、旅の人が見つけて持ってつたかも知れない」

「そいじゃ、家にはもう一つもランプなしになっちゃった？」

「うん、ひとつもなし。この台ランプだけが残っていた」

とおじいさんは、ひるま東一君が持出したランプを見ていった。

「損しちゃったね。四十七も誰かに持ってかれちゃって」

と東一君がいった。

「うん損しちゃった。今から考えると、何もあんなことをせんでもよかったとわしも思う。岩滑新田《やなべしんでん》に電燈がひけてからでも、まだ五十ぐらいのランプはけっこう売れたんだからな。岩滑新田の南にある深谷《ふかだに》なんという小さい村じゃ、まだ今でもランプを使っているし、ほかにも、ずいぶんおそくまでランプを使っていた村は、あったのさ。しかし何しろわしもあの頃は元気がよかつたんでな。思いついたら、深くも考えず、ぱっぱとやってしまったんだ」

「馬鹿しちゃったね」

と東一君は孫だからえんりよなしにいった。

「うん、馬鹿しちゃった。しかしね、東坊——」

とおじいさんは、きせるを膝《ひざ》の上でぎゅッと握りしめていった。

「わしのやり方は少し馬鹿だったが、わしのしょうばいのやめ方は、自分でいうのもなんだが、なかなかりっぱだったと思うよ。わしの言いたいのはこうさ、日本がすすんで、自分の古いしょうばいがお役に立たなくなったら、すっぱりそいつをすてるのだ。いつまでもきたなく古いしょうばいにかじりついていたり、自分のしょうばいがはやっていた昔の方がよかったといったり、世の中のすすんだことをうらんだり、そんな意気地《いくじ》のねえことは決してしないということだ」

東一君は黙って、ながい間おじいさんの、小さいけれど意気のあらわれた顔をながめていた。やがて、いった。

「おじいさんはえらかったんだねえ」

そしてなつかしむように、かたわらの古いランプを見た。

第7回 青空文庫朗読コンテスト 一般の部 課題
新美南吉・作「おじいさんのランプ」より抜粋

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年7月16日発行第1刷

入力：浜野智

校正：浜野智

1999年4月20日公開

2011年4月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。